

序

また学者らしい学者が一人、三田の山を去る。内池慶四郎先生は一九三二年生まれであるから、来年に迫った定年は避けて通ることができない。先生が法学部助手に就任されたのが一九五七年であるから、四〇年の長きにわたって法学部で研究と教育に携わってこられたことになる。

人にはそれぞれ心の葛藤がある。そのことをわきまえずに人を評することは本人にとってまことに迷惑なことである。そのことを十分知りつつも、私にとつて内池慶四郎先生は超俗の人である。先生は世事を避けることなく、なおかつそれにこだわらない。このような姿は生まれつき備わったものなのか、あるいは長年の人生の経験に基づくものなのか、私にはわからない。自らの小人ぶりを意識するとき、そのような先生の生き方が羨ましくて仕方がない。確かに、定年は淋しさを伴う一つの関門である。先生も人としてこの関門をくぐり抜けなくてはならないとしても、そこを抜け出したことにそれとはかわりなく先生の世界が存在する。

内池慶四郎先生の民法学の核心は時効法の研究にある。先生の研究の特徴は、日本民法成立の沿革や立法趣旨を丹念に探究し、それらの詳細な考証の上に精緻な条文解釈を展開するところにあるとされる。先生は一九六三（六四年）に西ドイツ・ザールラント大学に留学された。「福沢基金」による第一回目の塾派遣留学生の一人であ

った。ドイツ留学は、これまでの日本における研究に加えて、若き日の先生の民法研究に大きな足跡を残した。この時期の研究成果は『出訴期限規則略史——明治時効法の一系譜——』に結実し、先生は本書によって義塾賞を受賞された。

内池慶四郎先生はその後一貫して時効法の研究に没頭された。若き日に抱いた学問的関心を長期にわたって持ちつづけることがいかに困難であるか、われわれが経験しているところである。とかく右顧左眄して時流に乘ろうとする学者が多いなかで、これほどまでに一つの問題を究めようとする先生の情熱と学問的良心に敬意を表したい。これらの研究は、消滅時効法に関する『不法行為責任の消滅時効——民法第七二四条論』、『消滅時効の原理と歴史的課題』の二冊の大著として近年刊行された。これらの著作を含む先生の学問的業績に対し、荣誉ある福沢賞が与えられた。

内池慶四郎先生のいま一つの学問的関心は、法律学科の学問的業績をいかにして継承、発展させていくかということにあつた。神戸寅次郎博士の学説の再評価は、このような先生の仕事の一環である。神戸博士は法律学科の最初の海外留学生であり、精緻な民法研究で学界で指導的立場にあつた先達である。内池先生は、津田利治名誉教授とともに、神戸博士の当時の民法の講義ノートを再現するという大変な作業をなされた。このような努力は、『神戸寅次郎民法講義』（津田利治共編）、『法律学者神戸寅次郎——慶應義塾の知的伝統——』となつて現れた。

内池慶四郎先生のこの問題に対する取り組みは単に個人的な学問上の関心から出たものではない、と私は理解している。その背後には、法律学科の学問をいかに再構築し、発展させていくかという思いがあつた。先生はどちらかというと言ふと寡黙である。しかし、時には学部会議においてされる先生の発言は、考えに考えたあけくの発言であり、学部を思う心情にみちている。先生の法律学科の学問の再評価の仕事はこのような心情と結びついた

ものである。

内池慶四郎先生は、以上の研究以外に、塾内外で多くの要職を歴任された。先生の自由で温かい人柄と相まって、内池研究会は多くの優れた研究者を輩出したことで有名である。塾外にあつて内池先生は、日本私法学会理事、文部省科学研究費助成委員などを務められた。また、塾内にあつては、司法研究室室長、体育会フェンシング部部长、評議員、メディアネット所長・兼図書館長などを歴任された。内池先生の重厚さを考えると、慶應義塾の学問を代表する図書館長の職がもつともふさわしいような気がする。それも定年を目前に控えて退かれた。今私は、四年にわたる激職を終えられた先生に対し改めて慰労の言葉を申し上げたい。

私はかつて内池先生夫妻と宴席を共にすることがいくたびあつた。時には学部先輩として日常的な会話を交わすこともある。しかし、それは普通の会話であつて、なかなか先生の味わい深い人柄に接することはできない。それにもかかわらず、先生に対する尊敬の念は止まない。

内池先生には、趣味の一つとして有名な紙ヒコーキがある。かつて私も、先生がヒコーキを飛ばして楽しんでおられるところを遠くから見ることがある。ヒコーキは必ず地上に戻ってくる。しかし、ここで現実を離れ想像をたくましくすれば、先生のヒコーキは宇宙に吸い込まれて戻ってこないような気がする。そこに先生の超俗の世界がある。先生には、法律家としての鋭い現実感覚と現実を離れて遊ぶ精神が混在している。それは、かつて愛読した稲垣足穂の世界に似ている。足穂は寡作な作家であるが、私はその的確な表現が好きである。現実に対する的確な描写は、いつの間にか世俗を離れた星の世界、小宇宙に引き込まれていく。ここで私は内池幻想を語ったわけであるが、日常的な普通の会話のなかよりも、現実とそれを越えた世界とのあいだを往復する想像の世界において先生とより意味のある会話ができるとような気がする。

最後に、先生の気持ちを察することなく、先生に対する私の思いを書かせていただいた。しかし、いま一度現

実に戻るとき、私は内池慶四郎先生がこれまでと変わらぬ学究生活を元気に続けられることを願ってやまない。

一九九七年一二月

法学部長 山田辰雄